絵本の力 復興に活用

柳田邦男さん 講演で提唱

感性磨き 地域につながり

「心の再生と地域の発展～絵本の力を見直そう」をテーマに講演する柳田邦男さん＝東京都新宿区の日本青年館で

ノンフィクション作家の柳田邦男さんが「心の再生と地域の発展～絵本の力を見直そう」と題して講演し、復興に向けて絵本の読み聞かせの活用を提唱した。

日本はコロナ禍で経済が疲弊し、大変な状況にあります。ネット社会の進行に伴い、人間関係や心の問題も起きています。震災復興を考える中で、経済や産業の復興と同時に人間の心の復興にも目を向けないといけません。心の成長を考えたときに絵本というのが大事なキーワードになります。

活気のある地域とはどんな地域か。商店街がにぎやか、人出が多い、観光地がにぎわう、それも活気でしょう。ただ身近なところとなると、温かい隣近所があり、路地裏で子どもが笑顔いっぱいで遊んでいる、一人一人が他者に思いやりを持って、何かあれば手を差し伸べる、そういうつながりがあるところです。

今はプライバシーが重視され、どこの家にどんな困った人がいるのかを知らない、聴覚障害者が避難警告のアナウンスを聞けなかったなど、さまざまな孤立があります。「おせっかいおばさん」。おせっかいなくらい、声を掛けてくれる。教えてくれる。そういう存在が大事になります。

絵本は大人の感性も磨きます。読み聞かせをすると、母親、父親が子どもの感性の素晴らしさに気付くのです。子どもの反応から大人が学ぶわけです。スマートフォンのやりとりだけでつながりができていると思っていると、大間違い。生身の触れ合いや、表情やスキンシップを通じて、心が発達するのです。

■

東京都荒川区で絵本推進アドバイザーをやらしてもらっている中で、お便りを頂きました。地域の生涯学習として、年配者十数人が佐野洋子さんの絵本「おじさんのかさ」の読み聞かせをしたそうです。

物語では、紳士気取りの男性はいつも高級な傘を持ち歩いていますが、大事な傘をぬらしたくないので、雨が降っても開かないのです。ある時、雨宿りしていると、小さな子から「傘に入れて」と頼まれたが、知らん顔をする。すると、その子に別の子が声を掛け、相合い傘で歌いながら楽しそうに帰っていくんですね。男性も自分の傘を開いてみると、雨音を感じ、歌を口ずさみました。

読み聞かせの後、「年齢を重ねると考えが凝り固まり、心を開かなくなる」「頭を解放して暮らさないといけない」といった話に発展したそうです。

福島県矢祭町の小学校で十年ほど前、私が翻訳をした絵本「ヤクーバとライオン」の読み聞かせをしました。アフリカ奥地の風習に従わず、ライオンの命を守った若者の話ですが、感想文を書かせると「僕は仲間外れを恐れて、相手をいじめていた」という子がいたんですね。この小学校ではいじめグループが自然消滅したそうです。

■

全国ではさまざまな取り組みがあります。北海道士別市は絵本ツアーを始めました。そこでは畳屋さん、お花屋さん、旅館などを巡りながら読み聞かせをします。親子で街にどんな店があるのかを知ることで地域の文化ができます。

佐賀県伊万里市黒川町では使われなくなった電話ボックスや大工さんの手作りの本箱などを使って、街の八カ所に絵本を置いています。先月末にオープンしたばかりですが、誰もが自由に身近に読み聞かせができます。街全体の雰囲気が変わっていくのです。

困難な時代に子どもと向き合い、大人が感性を磨き直す。私はそれを絵本の地域文化、絵本の家庭文化と呼んでいます。絵本を巡る文化の創造にぜひ取り組んでいただきたいです。

本社・城南信金など主催 「東日本大震災から10年 復興の軌跡とこの先の挑戦」

共に、今までもこれからも被災地の皆さまと―東京新聞、福島民報社、城南信用金庫などは共催で10日、復興支援イベント「東日本大震災から10年　復興の軌跡とこの先の挑戦」を日本青年館ホール（東京都新宿区）で開催した。10年は一つの節目だが、復興はまだ道半ば。福島県の首長や高校生らが参加し、思いを新たに、共に歩み始める「第一歩」となるイベントとなった。

逆境克服への挑戦続ける

内堀雅雄・福島県知事

福島は複合災害に見舞われているため、十年八カ月たっても復興は現在進行形。では今、何をすべきか。それは今日の演題でもある挑戦です。地震、津波、原発事故、風評被害、風化の加速…。このような困難や逆境を克服するために挑戦を続けなくてはいけません。

けれど挑戦が失敗することもあります。心が折れそうになった時に支えていただいたのが、（日本酒の瓶を掲げて）こちら。「絵舞（えまい）」というお酒で、四十七都道府県のお米によって造られています。こういった絆の力が、落ち込んでしまう時に「もう一回頑張っか」と思わせてくれました。

福島県だけではありません。東北も日本全国も、世界の国や地域も困難に向き合っています。ぜひ皆さんと共に「それぞれの困難、難しさあっけど、一緒に頑張ろう。共に前に進もう」。その思いを一つにできることを心から祈念しています。

西銘恒三郎復興相 処理水 国が前面に

東日本大震災で亡くなられた方々に哀悼の意をささげますとともに、被害に遭われた全ての方々に心よりお見舞いを申し上げます。

被災地の方々の絶え間ない努力と国内外の支援により、復興は着実に進展しています。一方、地域によって進捗（しんちょく）状況はさまざまであり、地震や津波の被災地域では心のケアやコミュニティー形成の支援、水産加工業の売り上げ回復などの課題が残されています。

福島の復興は現在進行形で、中長期的な対応が必要です。ＡＬＰＳ処理水（汚染水を浄化処理した後の水）の処分に伴う対策など新たな課題や多様なニーズに対応しつつ、国が前面に出て取り組んでまいります。

震災の記憶を風化させず、教訓を広く共有していくことも大変重要です。「東北の復興なくして日本の再生なし」の決意の下、被災者に寄り添い全力で取り組んでまいります。

（屋敷利紀・復興庁審議官代読）

原発事故題材「きぼうのとり」朗読

県出身・佐藤ちひろアナ

大震災と原発事故を題材に、福島民報社が企画・制作した絵本「きぼうのとり」＝写真㊤。会場で、福島県出身のテレビ朝日アナウンサー佐藤ちひろさん＝同㊦＝が朗読した。

主人公は、海辺の町で暮らす小学生のハヤト、アツシ、ナツミ。町は津波にのまれ、３人は別の地域で避難生活を送る。父親を亡くした悲しみ、避難先での差別を乗り越え、３人の絆や復興への思いを支えにそれぞれ成長。家族との日々や美しい自然を未来に引き継ぐ大切さを伝える。

物語は、空から３人を見守る鳥の親子の視点で描かれる。結びにはこうある。「わすれないでください。あなたもだれかの大切なきぼうのとりなのですよ」

絵本は、震災発生から10年の３月11日に発行。自然災害の恐ろしさと人間の過信で起こした事故の悲惨さを風化させないため、10歳の子どもにも分かるように描いたという。

震災の教訓 継ぐ福島

本社・城南信金など主催 「東日本大震災から10年 復興の軌跡とこの先の挑戦」

避難生活の障害者と交流

県立あさか開成高校生 活動発表

福島県立あさか開成高校（郡山市）の生徒四人が登壇し、東京電力福島第一原発事故で今も避難生活を送る障害者との交流や、震災や原発事故から立ち直っていく子どもたちの姿を描いた絵本「きぼうのとり」などについて語った。

「震災の時、私は小学一年生。その時の恐怖は十年経過した今も記憶に残っている」。こう話した三年生の宍戸永実さんは今年三月、沿岸の浜通り地域から避難してきた障害者の就労に関する話を聞いて「誰ひとり取り残さない未来をつくりたい」と誓った。農業などの就労を支援するNPO法人「しんせい」（郡山市）のボランティアに加わり、農作業やかばんの製作をサポートしている。

読み聞かせボランティアの部活動に取り組む二年生の須藤聖菜さんは、障害者にも健常者にも、分かりやすい紙芝居を十二月の上演に向けて制作中。また「きぼうのとり」の読書を通じた校内学習では、生徒たちが皆、誰かの役に立ちたいという思いを持っていることに気付いた。「震災からの教訓を忘れずに、次の時代へつなげる使命感を持った」と力を込めた。

三年生の中野希瑛さんは子どもたちへの「きぼうのとり」の読み聞かせを練習している。絵本に登場する黄色い鳥の絵柄をあしらったエコバッグのデザインも考案。エコバッグの製作には、同校の生徒に加え「しんせい」を利用する障害者らも参加し、共同作業で作り上げた。

最後は日本文化部に所属する二年生の大和田麗さんがスピーチした。福島県産食材を使った和菓子の考案や「まだ残る食材への風評を払拭するために」、さまざまな料理コンテストへ応募していることを報告。「県産食材のおいしさと魅力を発信し、多くの人に食べてほしい」と訴えた。

活動について発表する、あさか開成高校の（左から）宍戸永実さん、須藤聖菜さん、中野希瑛さん、大和田麗さん＝東京都新宿区の日本青年館で

各地青年団 災害時に協力

伊藤加奈子
日青協常任理事

全国各地で活動する青年団の全国組織「日本青年団協議会」（日青協、東京都新宿区）の常任理事で、仙台市の伊藤加奈子さんは「震災復興に取り組んだ若者たちの10年」と題して講演した。「震災の記憶を風化させない」をスローガンに、震災の教訓を共有し、防災や減災に生かす活動を実践してきた青年団の足跡を紹介した。

青年団の団員数は全国で約三万人。統一された年齢の基準などはなく、それぞれの地域で自主的に運営している。震災当時、各地の青年団が現地の復旧支援や募金活動などに乗り出し、日青協が全国の仲間との橋渡し役を担ったという。

伊藤さんは「能登半島地震や阪神淡路大震災が起きた時、全国の仲間が助けてくれたことが、世代を超えて連綿と青年団の中に受け継がれています」と語った。

私たちは、震災から何を学んだのか。あの日から三年、四年と経過するうち、そんな問いが生じたという。震災を生き抜いた仲間たちも「被災の現実を伝えたい」と口にしていた。

日青協は、被災した青年の生活記録をまとめた冊子「生きる」を作製。冊子に加え、広く共有するためウェブサイト版を展開し、震災を振り返る二十二枚のパネルも用意した。

「仲間を亡くした悔しさ、故郷の壊滅的な被害へのやり場のない気持ち。自分たちの体験をつづった背景には、複雑な思いがある」と伊藤さん。阪神淡路大震災の教訓が役立ったように、「今度は自分が発信しなければ」との責任感も背中を押しているという。

日青協は、一九五一年の設立から今年で七十周年を迎えた。伊藤さんは「一人の青年として何ができるのかよりも、青年団の仲間や地域の方々とつながり、今後、未来に向けて歩きだせるのだと思う」と語った。

ダンス、歌で彩り

イベントの後半では、被災地を勇気づけた温泉施設スパリゾートハワイアンズ（福島県いわき市）のダンシングチームがたおやかなダンスを披露。福島県出身の歌手つのだ☆ひろさんが、スパリゾートハワイアンズを運営する常磐興産の前身「常磐炭礦」の社歌「我等の力」などを熱唱した。

㊤フラダンスを披露するスパリゾートハワイアンズのダンシングチーム
㊦会場を盛り上げるつのだ☆ひろさん

最先端の研究機関つくる／魅力ある農林業に力／わくわくするふるさとを／新たな町へ企業誘致も

福島県内の自治体トップがメッセージを送る「復興の歩みとこの先の挑戦」では、トップ4人が福島の復興の歩みや道のりで得た教訓、今後の展望などを話し合った。

県内4首長

内田広之 いわき市長

震災で468人が亡くなった。災害の教訓を次世代に伝え、生かす目的で「いわき震災伝承みらい館」を整備した。地元の病院を災害に強くするための取り組みを続けてきた。い

佐川正一郎 矢祭町長

災害に対する行政の指導力、危機管理能力が問われている。一昨年の台風19号では町内の集落が孤立し、対応に奔走するという事態も経験した。福島の再生なくして日本の再生

杉岡誠 飯舘村長

10年間、チャレンジの日々だった。村は全村避難という厳しい事態も経験した。福島市内に多くの人が今なお避難している。避難先で農業が続けられるよう、気持ちが途切れな

伊沢史朗 双葉町長

今なお全町避難が続く唯一の自治体だ。10年も住民がふるさとに戻れない。7000人の町民は北海道から沖縄まで、全国42都道府県に避難している。人々が町に戻って、ようやく